

いよいよ泊3号機が北海道の歴史に汚点を残す情勢になってきた。道知事と北電、保安院の悪行をしっかりと記憶しておくために、週刊現代がスクープした泊原発検査記録改ざんの経過を掲載する。斉藤和義の歌ではないけれど「それでも、続ける気なのか？はるみちゃん」・・・そんな台詞がでてきそうだ。～ 週刊現代 6月18号より 抜粋 ～

「スクープ 原発検査員が実名で告発 私が命じられた北海道・泊原発の検査記録改ざん」

告発したのは藤原節男(62歳)さん。隣は奥さんの修子さん。独立行政法人「原子力安全基盤機構」の検査員として、全国の原発の安全検査を行ってきた人です。名門・灘高校から大阪大学工学部原子力工学科に入学したエリートエンジニア。同窓生や恩師には「原子力村」の大物たちも多い。三菱原子力工業(後に三菱重工に合併)の社員として、日本原子力研究所への派遣などを経験し、2005年に原子力安全基盤機構に入社。原発との関わりは大学入学から実に40年以上に及ぶ。

～ 前半略 ～



【藤原氏の告発(一部)】

当時、北海道電力の泊原発3号機は、建設が終わり、使用前検査の段階に入っていました。私は電気工作物検査員として、同原発で3月4日と5日の2日間にわたって『減速材温度係数測定』という検査を行ったのです。これは原子炉内で何らかの原因で冷却材の温度が上がっても、原子炉出力を抑えることができるかどうかを判定する基本的な検査で、どの原発でも、この検査なしでは運転することは許されません。ところが、4日の検査では本来なら『負』にならないといけないこの係数が『正』になってしまった。このまま運転すれば、臨界事故につながりかねない危険な状態です。

そこで、翌日の検査では、部分的に制御棒を挿入し、ホウ酸の濃度を薄めるなどの対策を取って検査をし直しました。その結果、係数が『負』になったので、条件付きで合格としたのです。私は当然、4日の『不合格の検査記録』と5日の『条件付き合格の検査記録』の両方を、上司のグループ長に見せた。

ところが、グループ長は3月4日の検査記録を削除するように指示しました。これは記録改ざんに他なりません。納得できなかった私は、グループ長に検査実施要領にもあるとおり、不合格の検査記録も必要だと訴えました。それでもグループ長は『私は出来の悪い検査記録の不備を指摘しているだけだ。このままでは承認印は押さない』と、あくまで私に改ざんを要求する。挙げ句の果てには、私がその要求に従わない場合、『(査定について)評価を絶対に下げてやる』と恫喝したのです。

要するに、原発の安全点検(今回、急に出てきたストレステストも同様)は、原発の推進機関の元締めである経済産業省の外局である原子力安全・保安院の、そのまた下請けの原子力安全基盤機構に丸投げ。原子力安全基盤機構はプロ技術者集団だが、その検査結果を正確に保安院に挙げても通らないことを知っているの、改ざんが日常的に行われている、ということです。原発を推進する側が、下請けに検査を依頼し、「気に食わない」と通さないのです。その責を担っている原子力安全・保安院は、原発のことなどまったく分からない素人集団。

心ある技術者が危険性を知らせると、「君の将来に良いことはないぞ」と恫喝する。これほど腐った連中が、日本の原発を推進してきたのです。彼らは放射能の恐怖に対して不感症なのです。もっと正確に言えば、自分と自分の家族以外の命には、あまり関心がありません。こうした人間たちは、何のために原子力分野の仕事を選んだのでしょうか。そこにはプライドもなく、理念も無く、倫理さえありません。完全にモラルハザードを起こしています。

泊原発の本格営業運転は、2012年度内のプルサーマル本格運転のためのアプローチです。いずれ、この一帯で地震が起きるでしょう。そして、福島第一原発事故が再び繰り返されるのです。そのとき、季節風に乗って、放射能の雲は北海道をオホーツク方面に流れていくでしょう。

日本の最後の穀倉・北海道がなくなるのです。なんと馬鹿げた連中でしょうか。というか、すでに狂っている。

泊原発の近くにある奥尻島の大地震と大津波を、もう忘れたのでしょうか。

8月15日には札幌でデモがあり我が家も家族で参加してきた。総勢100人ぐらいたったのだろうか。道民の人の良さ？無関心？はいつかとてつもない付けを払わされることになるかもしれない。北海道の自然にあこがれてやってきた私だが、ずっとこの地で暮らしてきた道民はこの危機を受け止めているようには見えない……………。